

大阪天満宮社報

第51号

てんまつんじん



「菅公像 邦年筆」

奉祝

秋篠宮悠仁親王殿下御誕生

年首御慶

丁亥元旦

平和のための世界会議.....	3 頁
「蛭児尊」の歴史.....	4 頁
本居宣長と天満宮.....	6 頁
天満天神繁昌亭オープン.....	8 頁
近藤南州と猶興書院.....	10 頁
第四回「てんまつん天神まつり」.....	13 頁
復興「天満天神えびす祭」.....	16 頁

表紙解説

「菅公像」

大阪天満宮所蔵 紙本墨色
縦九八・〇cm 横七八・三cm
邦年筆 昭和三年（一九二八）
大阪工業大学助教授

松浦 清

天神画像といえ、室町時代から江戸時代にかけて盛んに制作された強装束の束帯姿や、禅宗教団で創作された渡唐天神像などが思い浮かびます。それらの作品に見られる図像的特徴は、その後も継承され、近代以降も天神画像は多数制作されました。しかし、近世と近代の境界で日本の社会が経験した激動の大変革は、連綿と描き続けられた天神画像にも変化をもたらします。

表紙に掲載した作品は、一瞥して従来の天神画像と大いに異なっていることがわかります。画面中央で岩に腰を下ろしているのは、束帯姿の菅原道真公ですが、画面の下辺には子供が三人描かれています。よく見ると、菅公の足もとには「大」という文字があり、画面右下の子供の前にも、やや小さめに「大」の文字があつて、この子は右手に短い木片を持ち、書写するポーズで描かれています。菅公も右手に細長い棒のようなものを持っており、また、画面の上辺に帯状に群青が塗られています

が、その中に白い波状文が装飾的に描かれているのは、この場面が水際であることを示しています。これらのことから、この作品は、菅公が水際の砂浜を利用して子供たちに文字を教えているところを描いたものと解釈されるでしょう。

ここに描かれているのは天神ではなく、歴史的存在としての菅公です。菅公は延喜元年（九〇二）に大宰権帥に左遷されますが、西国下向に際してのさまざまな物語が各地に伝わっており、この作品に描かれているのも大宰府へ向かう途中の下船の折の創作逸話です。

このような菅公の姿は、従来の怒り天神に見られたような畏怖の念を抱かせる天神信仰が、学問の神としての天神信仰へと大きく変化したことを背景としています。すでに平安時代中期に慶滋保胤は「天神為文道之祖、詩境之主也」（『本朝文粹』十三）と称し、大江匡衡も天神を「就中文道之祖、風月之本主也」（同書十三）と讃え

ていますが、このような考え方は鎌倉時代以降に一般化して、天神は文道の神として信仰されるようになります。この延長線上に天神が書道の大家であるとの信仰が生まれました。それを決定づけたのは、江戸時代の寺子屋における手習いと考えられます。そこでは、偽経の『天神経』が読誦され、「南無天満大自在天神」の神号が唱えられました。

明治維新を迎え、近代国家の形成期には、天神信仰は国民道徳と結びついてさらに大きな転換を迎えます。菅公が配所で作ったという「去年の今夜清涼に待す／秋思の詩篇独り断腸／恩賜の御衣今此に在り／奉持して毎日余香を拝す」は天皇に対する忠誠心の証として広く知られ、画題にも取り上げられています（挿図）。配流の途次の逸話を絵画化した作品と、いわゆる天神画像は、本来性

格を異にするものですが、天神＝菅公という天神信仰の立場からすれば、両者は単純に二分できないはずです。寧ろ、天神画像が菅公画像へと変化する際の様相を見極めることこそ必要でしょう。

画面右辺には「昭和戊辰三稔／如月望／邦年謹写」と記され、「邦年」（朱文方印）の印影があります。これにより、この作品は昭和三年の二月十五日に邦年という画家が描いたことがわかります。画家についての詳細は不明ですが、この日は釈迦の入滅の日、すなわち涅槃会の日ですから、神仏習合の名残が隠されているかもしれません。

装束束の束帯や、儀仗の太刀を佩用する平緒を統平緒とするのは古式に則る表現で、子供の健やかな成長を見守る慈愛に満ちた菅公の表情が印象的な作品です。



恩賜御衣図 松春筆（大阪天満宮）

第二十回 平和のための世界大会に参加して

権宮司 寺井種治

◆神社神道の代表として

本年八月三十一日から九月八日までイタリアのアッシジにて開催された「第二十回平和のための世界集会」に、神社神道の代表として神社本庁の派遣団の一員として参加させていた

できました。この「平和のための世界集会」は二十年前より毎年実施されており、今回は神社本庁の田中副総長（石清水八幡宮宮司）を団長に総勢十四名で参加致しました。

主催はローマを拠点とするカトリックの「セント・エジディオ共同体」で、世界各国からキリスト教各派をはじめイスラム教、ユダヤ教、仏教、ヒンドゥー教、日本からは神社神道、大本教、天理教、臨済宗などが参加しました。

◆サンマリノ共和国文部大臣と

我々はまず成田からローマへ向か



い一泊し、翌朝すぐに空路でサンマリノ共和国に向かいました。サンマリノ共和国は中心部が山頂にある人口三万人という大変小さな国であります。そこでサンマリノ政府の文部大臣と会談させていただき

ました。印象に残ったのは、サンマリノでは「家族」という最小限の共同体がしっかり確立しており、また家庭でのしつけや行儀を必ず教え、学校でも宗教教育を実施しているから、青少年の非行や犯罪は極めて少ないと大臣がおっしゃった事でありました。

まさに戦前の日本であり、今私たちが目指さなければならないものだと感じました。またサンマリノ共和

国は大変美しい国で、町を歩いていると心が洗われるような思いがしました。特に朝日と夕日を数度見る機会がありましたが、とても素晴らしいと感じました。

◆いよいよ世界大会へ

サンマリノで二泊しその後アッシジに向かい、そこで開催された「平和のための世界集会」に参加しました。初日の開会式に引き続き翌日には分科会が開かれ、我々はアジアの宗教者と共に世界平和の為の討論会に参加しました。そこでは、「神社神道は神話の中で何かあると神々が相集い相談し物事を決めている。これこそが対話で、神道は決して争いを好まず世界の共存共栄を願っている。」との旨が説明されました。

その後、市内各地で各宗教宗派による世界平和祈願祭が同時に開催されました。夕刻には全員で市内をパレードの後、聖フランシスコ大聖堂前の広場で閉会式があり、ここにはイタリアの大統領も臨席のもと宗教者による世界平和が宣言されました。

◆アッシジの精神

ここでよく耳にした「アッシジの精神」という言葉、これは二十年前

にヨハネパウロ二世の呼びかけによりアッシジで開催された世界の宗教者の平和を祈る精神を継承しようというものですが、その無欲で崇高な精神には大変感銘を受けました。

世界では冷戦以後も様々な戦争、紛争、テロが勃発しています。我々宗教者が平和を祈るという事だけでは決してなく、対話が続ける事によって平和への道が開ける事を信じていると感じました。最後に今回の世界集会参加の経験を今後の神明奉仕に生かして行きたいと思えます。



「蛭児尊」の歴史

「天満天神えびす祭」復興に寄せて 高島幸次

はじめに

江戸時代、当宮「蛭児遷殿」には、正月・五月・九月の十日に多くの参拝がありました。年三度の「蛭児尊遷殿神事」、すなわち「十日えびす」が斎行されていたのです。

なかでも正月の十日には、群衆が押し寄せ、怪我人まで出るほどの賑わいでした。しかし、昭和二〇年代後半ころから、神職による「神事」を斎行し続ける一方、氏子・崇敬者によって福笹・吉兆などを授ける「神賑わい」は途絶えました。

このたび、その賑わいが復活されるのを記念して(十六頁参照、当宮「えびす」の由来をご紹介します。

最古の史料

当宮における「えびす」については、延宝八年(二六八〇)の「摂州西成郡南中島惣社天満宮略御縁起」が最古の記録です。同「絵図」には、「御本殿五社」の一つとして「蛭児尊」が次のように記録されているのです。

蛭児尊 夷殿是也

此系ひすとのに付て

後花園院の御繪旨あり

現在、本殿には、右から「野見宿禰」「手力雄命」「天満大自在天神」「猿田彦」「蛭児尊」の五柱を御祀りしていますが、その左端の「蛭児尊」は少なくとも、この延宝八年以前から祀られていたことが判ります(注記に「御花園天皇御在位一四二八〜六四〇年の御繪旨」とありますが、その存在は確認できませんでした)。

そして、「同縁起」に描かれた「境内図」には「蛭児遷殿」は見えませんが、当時は、そのつど境内に仮設の「仮遷殿」を用意して参拝に備えたようです。

戎島御旅所からの移転

ところで、当宮に「えびす」を祀るようになった由来については、「家事記録」(年未詳)が次のように伝えています。

戎御社と申すは、元来川口にこれある所、天満宮銚流し御祭礼のみぎり、銚の留りたる所を、

二系統の「えびす」

私たちが一般に「えべっさん」と呼ぶ神様は、二種の起源をお持ちです。一つは、神話のイザナギ・イザナミの神が高天原で国生みをしたときに、最初に生まれた「蛭子」を「えびす」と考える説で、瀬戸内海地方に多く広まっています。

これに対して、日本海側では「事代主命」を「えびす」とするものが多いようです。「事代主命」は「大國主神」の子で、出雲を天照大神に

譲るように父に勧めたと伝えられる神様です。

「蛭子」系も「事代主命」系も、ともに海と深い関わりを持ちます。現在では「商売繁昌」の神様とされますが、もともとは「海上・漁業」の神様だったのです。

その表記については「蛭子」「戎」「夷」「恵比須」「恵比壽」など様々な漢字が当てられますが、当宮の場合、古い資料には「蛭児」が当てられていますので、蛭子系の「えびす」ということが判ります。

御旅所と定め申すべき由の処、右銚、戎御社これある場所に漂

着す、これに依り、戎御社を天満宮御社地の内へ移し社を造営し、右跡を御旅所と定める。

当宮では、江戸時代初期(一六四〇年代)に雑喉場に御旅所を常設し、

銚流神事は中止しました。ですから、この由来はその時のことになります。

しかし、その後に雑喉場から戎島に御旅所は移転されており、その「戎島御旅所」の南方に「戎御社」が確認できるのです。貞享四年(一六八七)の「大坂大絵図」には、戎島御旅所の近くに末社「えびすの宮」が、元禄年中(一六八八〜)の「大坂東

西南北町嶋之図」には「夷宮」が描かれています。

どうやら、先の由来は、①雑喉場御旅所の常設と、②戎島にあった「戎社」を結びつけた伝承のようです(①と②の間には数十年のズレがあります)。

また、「御社地の内へ移し社を造営」と記しているのも、疑問なのです。なぜなら、延宝八年(二六八〇)の境内図には、「蛭児遷殿」は描かれていないからです。古くは、年三度の「十日えびす」の日にだけ、仮設の「遷殿」を設けて御遷ししていたのですから、この由来のように、当初から「社を造営」したというのは

無理があるようです。

のち、「蛭児遷殿」が常設された際には、「西門」を入ったすぐ左手に鎮座していました。そのため西門を、現在でも「蛭児門」と呼び習わしているのです（決して、西門前に「えびす呉服店」があるからではありません。それでは話がアベコベです）。

それはともかく、「十日えびす」が年に三度行われたことは、江戸時代を通じて確認できます。なぜか明治以降には、正月だけになったようです。そして、その「十日えびす」も、昭和二〇年代後半には、神事祭儀だけを継続し、神賑わいは途絶えたのです。

神酒笑姿（みきえみす）

このように、当宮の「蛭児尊」や「蛭児遷殿」の起源については、今後の研究に俟たねばならないことも多いのですが、江戸時代の「十日えびす」の賑わいについては、様々な記録が伝えられます。

なかでも、寛政一〇年（一七九八）刊行の『摂津名所図会（初版）』には、次のような興味深い記録があります。蛭子祠は菅神真筆の像を安ず。神酒を供すれば御顔紅葉したまふ。かかるがゆゑに神酒笑姿と

も称す。正月十日群参す。

当時は、菅公自筆の画像を掲げていたが、御神酒をお供えすると、その御顔が紅葉したというのです。

この「神酒笑姿」は大評判となり、います。

享和二年（一八〇二）の正月十日に

は、殺到した群衆のため、本社の大鈴の釣金がすり切れて落下、子どもが怪我をするという騒ぎまで起きて



「摂州大坂天満宮御社内之図」（部分）中央下に「戒門」、左下に「蛭子祠」が見える。

御神酒天神

ところで、この「神酒笑姿」と同様の伝承は、実は天神画像でも確認できます。

大生郷天満宮（常総市水海道）に伝えられる「神酒天神画」（茨城県指定文化財）がそれです。この画は、室町末期から桃山時代の制作と考えられますが、当宮の「神酒笑姿」と同様の伝承をもちます。また、東光院（名古屋市南区）にも、同様の「出世お神酒天神」が伝えられます。

このような頬を染める画像は、平賀源内の考案だという伝承もあります。源内が十二歳のときに、顔の部分を透明にし、その背後に肌色と赤色を上下に塗った紙をスライドさせる仕掛けを考案したといわれています。現在も、「平賀源内先生遺品館」（香川県さぬき市）に「御神酒天神」として展示されています。この伝承は、のちに木本正次の小説『少年平賀源内』や、五月一朗の浪曲『お神酒天神』でも紹介されています。

このように、画像が頬を染めるといふ伝承は各地に広まっていたようです。さて、今年のえびす様は、皆様の前で赤く頬を染められるのでしょうか。

本居宣長と大阪天満宮

京都大学総合博物館
上杉 和央かずひろ

私義此度勢州江罷帰候節、兼而宿願之品御座候付、大坂天満天神社并南都春日社江立寄参詣仕長谷海道道中八日振二而罷越申度〔右御暇〕奉願候、以上

とあり、この時の大坂行きの主たる目的地が大坂天満宮であったことが分かる。

今回は、本居宣長（一七三〇—一八〇一、伊勢国松坂に居住）と、大阪天満宮との関わりを紹介してみたい。

行中、京都では北野天満宮に詣でている、それでも、伊勢から出てきた「お上りさん」が大坂の名所の一つを詣でた、というくらいの訪問だったであろう。

◆青年時代の大坂天満宮訪問

最初の来坂は、寛保四年（一七四四）四月二十一～二十五日のことであった。訪問先は、「表御堂・裏御堂・座間大明神」（二十二日）、「道頓堀芝居・一心寺・天王寺・生玉宮・高津宮・御城・高麗橋」（二十三日）、そして「天満天神宮・山崎寶寺観音開帳・湯殿山大日如来開帳」（二十四日）で、大阪天満宮もそのコースにしっかりと入っていた。

この時の宣長は、弱冠十九歳であり、まだ国学にも出会っていない。宣長は「天神さん」に対して篤い信仰を寄せていたので、他の名所よりも印象深かったであろうが（この旅

◆寛政期の三度の大阪訪問

次に大坂の地を踏んだのは、寛政五年（一七九三）三月十九～二十一日のことであり、実に五〇年ぶりの来坂となった。この時の大坂行きの理由は、残された書簡にはっきりと示されている。それは、長男春庭の眼病を治すため、当時大坂に滞留中の播磨の眼科医に治療を乞うためであった。長男として家と学問を継ぐべき存在であった春庭の眼病は、宣

長にとって非常につらいものであり、血眼になって治療先を探した。しかし、その苦勞空しく、翌年に春庭は失明してしまう。

次の来坂は、寛政六年（一七九四）

の閏十一月二十四～二十五日のことである。前年末から和歌山藩主への進講のために和歌山に滞在していた時の帰り道のことだ。二十四日は着いただけでどこも見物していない。二十五日の日記には「高木理兵衛宅ヲ訪、天満天神ニ詣、桑名ヤ七之助店訪、夜船上ル」とあって、天満天神に参拝している。ちなみに小遣い帳も残っており、「天神社参銭」は十二文だった。同じ小遣い帳に豆腐一丁が十二文とあるので、おおよその価格は分かるだろう。

次の享和元年（一八〇二）の二月二十四～二十五日の訪問が、宣長最後の来坂となった。これも、和歌山からの帰り道に大坂に立ち寄る、という形で来訪だった。二十四日は住吉社と天王寺に、二十五日は「高津宮、圓珠庵、天満天神等ニ詣でている。しかも、和歌山からの帰国に際して藩に提出した「帰国願書」の下書きには、

ここに「宿願の内容は、はっきり言つてよく分からない。『古事記伝』完成（寛政十年・一七九八）に関係するかも知れないが、それでは大阪天満宮と春日大社を特に挙げた理由が説明できない。和歌山から松坂への帰路に大坂・奈良へ「寄り道」するための方便だったとも考えられる。ただ、たとえそうであったとしても、大坂の行き先地として、「天満天神社」を挙げたことは紛れもない事実である。

こうしてみると、宣長は大坂に来れば、ほぼ必ず大阪天満宮に参詣していたことが分かる。しかも成人してから寛政六年と享和元年の参詣は二十五日になっており、明らかに大阪天満宮参詣を中心として大坂行きの日程を組んでいる。宣長にとって、大阪天満宮は数ある大坂の名所・寺社のなかでも特別な存在だったと言えるだろう。



◆『古事記伝』中の「渡邊氏」

さて、宣長の代表作と言え、やはり『古事記伝』である。中でも三十五巻は高津宮之巻となっているが、そこに次のような割書がみえる。

上本町通安曇寺町筋の民家の後に小祠ありて今に古宮跡と云伝へたり、此高津宮の跡なり、天満社司渡邊氏の家に蔵る難波の古図を以て考るに此處にあたるべし

宣長は、高津宮跡についての伝承を「天満社司渡邊氏」が所蔵していた古図をもとに検証した、という。

「渡邊氏」とは、大阪天満宮の祝部渡辺家のことである。『古事記伝』三十五之巻は寛政五年九月に起稿されていることをふまえれば、八代吉豊を指していた可能性が高い。吉豊は木村兼葭堂とも親交のあった人物で、兼葭堂と地図の貸借もしていた。しかし、地図を多く収集していたのは、吉豊よりも、むしろ父親の七代吉賢の方だった。吉賢の収集した地図の一部は、大阪歴史博物館に収蔵されている（奥田コレクション）。また、吉賢の友人であった森幸安が吉賢の所蔵地図のうち何枚かを模写しており、それは国立公文書館などに残さ

れている。これらから、少なくとも一〇〇枚近くの地図を持っていたことがうかがえる。

では、宣長はどうやって「渡邊氏」の「難波の古図」を閲覧したのだろうか。原図もしくは模写図を人づてに借り受けて松坂で閲覧した可能性もないではないが、『古事記伝』の表現からすれば、「渡邊氏の家」で閲覧した、もしくはそこで模写をしたと考える方がよいのではないだろうか。単なる推測であるとしても、一考の価値はあるだろう。

もしそうだとすれば、それはいつか。これは『古事記伝』執筆と合わせて考えれば、寛政五年三月の大坂訪問時に限定できる。寛政五年の大坂行きは、春庭の眼病治療を願う悲痛な訪問であった。その中にあつて、『古事記伝』の資料収集のために大阪天満宮に立ち寄った可能性があることになる。

わずかな訪問時間のなかで、「渡邊氏」がそのような資料を持っていることを偶然に聞きつけたわけではないだろう。あらかじめ知っていたからこそその訪問であったはずである。たとえば、貸借による松坂での閲覧であったにせよ、「渡邊氏」の地図所蔵の情報が遠い松坂の地に届かなければ、

ば、不可能である。「渡邊氏」の地図収集は、知識人層のなかである程度の知名度をもって広まっていたのだ。

◆梅花殿の「高天原神留座」額

最後に、一枚の額を紹介しておきたい。それは、大阪天満宮の梅花殿内に掲げられた「高天原神留座」額である（写真）。実は、この額は宣長の筆によるものである。作成年は不明だが、署名に「本居中衛宣長」とあるので、通称を「中衛」に改めた寛政七年二月一六日以降の作であることは間違いない。

この額の存在を知ったとき、これこそ享和元年の「宿願」に関係するのでは、と一人で色めき立っていた。しかし、後で聞いた話によれば、この額は「鴻池さん」から寄進されたものだという。ものごと、そう上手くはいかない。

ただ、これまでに見てきたように、宣長と大阪天満宮との関係が、意外なほど密なものであったことを考えると、今この額が梅花殿に飾られているのが何かの因縁にも思え、また飾られるべき場所に飾られているとも思えてくるから、不思議なものがある。



本殿に参拝する一行
前列右から春之輔・春團治・三枝



大阪締めをする太鼓中の島田総代
手前後ろ姿右は三枝、左は春團治



大工門から繁昌亭へ向かう人力車



大混雑の繁昌亭前

生田花朝の絵が 繁昌亭の緞帳に



天満天神繁昌亭の緞帳には、近代大阪を代表する画家である生田花朝（一八八九〜一九七八）が描いた「浪花天神祭」の絵が使用されています。花朝は、何度も「天神祭」を描いていますが、緞帳には当宮所蔵のうちの一枚を使用しました。こけら落としの当日には、花朝さんの

養女である武田美津子さんと、お母様の有本幸子さんの姿がありました。有本さんは、約三〇年にわたって花朝のお世話をされていたことから、桂三枝会長が、お二人を招待されたものです。お二人は当宮の寺井種伯宮司にもご挨拶され、三枝会長とも歓談され、感慨深く緞帳を御覧になっていました。

京都の工場で二ヵ月かけて、約三〇〇色の糸で織り上げられた緞帳は、寄席を一層華やかな雰囲気演出しています。御来席のおりには、是非、お楽しみください。

天満*天神繁昌亭

こけら落とし



天六を出発する赤い人力車。桂春團治が乗り、桂三枝が曳く。
右には桂春之輔・笑福亭鶴瓶



宮入するお練りの先頭。境内で待ち構える地車講

戦後六〇年ぶりの復活となる上方落語の定席「天満天神繁昌亭」は、去る八月七日に当宮の北側で竣工式を行い、九月一日には、宮司主催による「内覧会」が行われ、氏子総代らが、繁昌亭の文字通りの第一席となる桂春之輔さん落語を楽しみました。

その後、いよいよ九月一五日に行われた「こけら落とし」の様子につ

いては、多くのマスコミによって報道された通りですが、改めて、繁昌亭の誕生を振り返ってみましょう。九月一五日前一〇時、天神橋六丁目の「大阪市立住まい情報センター」前で、落語家さん約四〇名が見守る中、桂三枝・上方落語協会会長や太田房江・大阪府知事などの来賓により出発式が行われました。式後、桂春団治さんが乗り込んだ「赤い人力車」を三枝会長が曳き、商店

街を練ってお当宮に向かいました。一方、当宮境内では「地車講」の皆さんが地車囃子で祝賀ムードを盛に到着すると、「太鼓中」の島田学総代の発声によって「大阪締め」を交わしてから、本殿に参拝し、繁昌亭の弥栄を祈願しました。

その後、大工門を抜けて繁昌亭前に移動すると、待ちかまえた関淳一・大阪市長らとともにテープカットが行われ、いよいよ繁昌亭はオープンしたのです。

近藤南州先生 と 猶興書院

水田 紀久



白砂清浄の大阪天満宮境内北隅には、神興庫、鳳輦庫と疊を並べ「天満宮第二文庫 南州近藤先生遺書と顔した白壁東向きの土蔵が厳存する。当地の耆碩近藤南州先生（一八五〇～一九二二）の遺著約二万点の収納庫である。傍らには大正十二年（一九二三）五月一日、門人等が建立した頌徳碑が在り、「享保以降、懷徳堂混沌社相繼起、儒先並出、浪華文教と繁華媲美、蔚然極其盛矣」と書き出されている。

中井氏懷徳堂は浪華漢学の、そして片山氏混沌社は詩文の、それぞれ代表として常に並称されるが、他にも篠崎氏梅花塾、藤澤氏泊園書院、大塩氏洗心洞、広瀬氏学塾はじめ、近世後期浪華の文運に寄与した教学機関は、学統学派の異、学風学是の別を保ちつつ、庶民教化の心学講舎とともに優に十指を超えよう。わが猶興書院近藤南州先生も亦、決して忘却を許されぬお一人である。

先生、名は元粹、字は純叔、南州と号し、別に蛭雪軒、読末見書楼等の号がある。伊予松山の人。父名洲は伊予新居郡立川村（新居浜市立川町）の農



天満宮第二文庫と頌徳碑



近藤南州先生 長柄の奥津城

家の出で石門心学をもって藩に仕え、藩の心学講所六行舎の舎主となり、士分に入り寄合大小姓格に進んだ（笠井助道『近世藩校に於ける学統学派の研究』）。息元脩（南洋、元弘（南嶽）に次いで先生はその三男である。先生、はじめ藤野海南のち芳野金陵に師事、二十七歳で来阪、天満宮籠町（北区南森町）に猶興書院を開いた。来阪の経緯は、いみじくも司馬遼太郎の長編『坂の上の雲』の、ごく初めの方でも触れられている。のち上洛、十年近く梨木神社畔、碩儒皆川淇園隠棲の地に寓したが（三島竹堂『浪華摘英』）、門人の請いを容れて浪華に戻り、権門貴人から遠ざかり、終生町儒者として庶民の木鐸たるを天職とした。先生の講釈は若い頃から破れ鐘のような大音声で、莫逆の友泉州の山田松堂が撰んだ墓碑銘にも「明弁詳悉、声撼隣壁、聴者嘆服」と特筆されている。同じく浪華の地に開塾した梅花書屋篠崎三島とは郷国を等しくし（伊予喜多郡内子村、現内子町）、泊園書院藤澤東咳・南岳父子は隣国讃岐出身ながら（東讃大川郡引田村、現東かがわ市引田）、先生ともども四国の生まれであることに変わりはない。そう言えば懷徳堂中井竹山・履軒兄弟の父贅庵は播州龍野、混沌社盟主片山北海は遠く越後新潟、そして咸宜園出の広瀬旭荘は西陲豊後の出身で、近世浪華にはいかに広汎な地域から偉物が蛸集、下帷したかと思ひ合わされる。うち、明治期から大正半ばまで近代大阪の文教を領導した名声噴々たる藤澤南岳（一八四二～一九二〇）とわが近藤南州とは「二南」の称をほしいままにした由である（墓碑銘）。

先生は大正十一年（一九二二）一月



水田紀久氏プロフィール

大正15年 九州生まれ

昭和26年 大谷大学文学部卒業

(国文学専攻)

大阪府立桜塚高等学校教諭、関西大

学教授、京都大学、大阪大学、立命館

大学、大谷大学ほか講師を歴任

文学博士

著書『富永仲基研究』(共著)

『近世浪華文学藝史談』

『近世日本漢文学史論考』

『水の中央に在り木村蒹葭堂研究』

ほか、著書、編著多数

環として蔵書分類目録が編まれ、漢籍は先生遺愛の書を主体として長澤規矩也博士の、国書は関西大学教授で図

書館長中村幸彦博士の指揮のもと整理されて、当時関大に奉職中のわたくしもお手伝いが叶った。先生の遺書はすべて目録に「近」の略符号が付されているが、内容は経史子集万般にわたたり、中には『草堂詩余』のような填詞集にもびっしり書込みがなされていて、先生が決して四書五経一辺倒の庸儒でなかったことを、如実に物語る。先生は瀬洛関閩の正統を承け、とりわけ左伝に通じ、かたわら風月を友とし逍遙遊社を結んで吟哦を楽しまれた。

この和漢書目録が完成してほぼ二十年後、本平成十八年(二〇〇六)十一月一日、当地古書肆の老舗松泉堂書店社長中尾堅一郎氏は、たまたま氏の姻戚三重県伊賀市、町野家の土蔵に昭和十九年より疎開中だった先生の自筆稿本類を中心とする旧蔵書五箱を、先代熊太郎氏筆の整理目録とともに大阪天満宮に寄進された。中には草稿等三百点のほか、先生の額入写真や先生着用の儒巾一着も含まれていた。わたくしが親しく儒巾なるものを眼にしたのは、滋賀県高月町雨森芳洲文庫整理の時以来であった。

当日は午前十時より寺井種伯宮司司掌のもと、長兄中尾堅一郎氏、令

四日、七十三歳で易簪された。先生永訣の詩より採って清徹先生と諡された。あたかもその二年前には、宿儒南岳先生も七十九歳で下世、「噫、余前哭南岳先生、今又哭先生、二年之間、両賢相繼而凋落、斯文寂寞、余将安適帰」と、碑銘の撰者は嘆じている。夫人内山氏、淑徳あり。三男七女有るも、その悉くは天寿を全うするに至らず、殊に男子が三人とも明治大正の交、わずか一年有半の間に季仲伯の順に世を去った。就中仲子元久の異国アメリカでの事故死については、後に触れる。

この逆縁の極み、子が親に先立つ人世最大の不幸として不幸は、思えば近藤元久兄弟に限らない。つとに海彼では孔夫子と鯉魚、白樂天と金鑾子・阿崔、また近く本邦浪華に限っても中井竹山と蕉園、細合半齋と

張庵等々、つぎつぎ想起され、あとに残された老父母の悲歎は到底筆舌に尽くされぬものがあつたであらう。殊に有為の三兄弟を前後相繼いで亡くされた先生夫妻の胸中は、けだし將軍乃木希典のそれを凌ぐものがあったらう。先生の墓碑は、現在も北区長柄の市設北靈園最北列近藤家墓域に、当初の場所よりの改葬、また墓石の改修は想像されるが、親縁の五基とともに恙無い。

先生の編著三十種を含む蔵書二万点は、歿後門人等の手で大阪天満宮に寄進され、猶興書院文庫として天満宮第二文庫に保管、それは丁度石垣を隔ててこのたび上方落語協会が新設の天満天神繁昌亭と、ほぼ背中合わせの位置に在る。昭和五十二年(一九七七)十月二十五日、御神忌千七十五年祭を機に、記念事業の一

弟心齋橋中尾書店主良男氏、そして次兄故榮二郎氏令息重宏君の三氏が参列し、関係者陪席して厳かに寄進式が執り行われた。実に南州清徹先生歿後、大正十二年門人等による遺著寄進より八十三年目とて、この奇しき剣合珠還は偏に御神助の賜物と、末席に列ったわたくしも感銘一入であつた。

今後、これらの典籍は、あるいは先に奉献の刊本との対校に資され、また先生の著述の推敲過程解明など書誌的基礎研究に役立つのみならず、南州猶興学究明の好個の資料として必ず活かされるであらう。大阪天満宮神主家であつた滋岡家の蔵書印文「末の世にもしこれを見てよめぬとて思案する人あらハ嬉しも」との「繁昌」殷賑を希求してやまない。

それこそ大塩焼けにも数次の大空襲にも、はたまた大震災にも加護を垂れ給うた天満大自在天神の神恩に報いる所以でもある。

最後になったが、先生の長柄の奥津城とはまさに対蹠の地、南は四天王寺境内墓地に建つ、第二子元久(一八八五―一九一二)の追悼碑にも参詣しよう。元久は先生の次兄元弘(号南窓)の嗣となっていたが、アメリカに遊学、カリフォルニア州

のカーチス飛行学校で水上機操縦の技を学び、明治四十五年（一九一二年）五月、在米邦人では最初の卒業生となった。帝国海軍より留学の三士官をコーチすること数月、内地での飛行協会就職も決まり、帰国直前、カーチス校長より新機種のカート操縦を囑され、「試乗連日、最後遇風、触物顛墜而死」（碑文）。時に大正元年十月六日（七月三十日改元）、年僅かに二十八歳の若さであった。

追悼碑の篆題は陸大一期生でわが航空界、スキー界の大恩人陸軍中将長岡外史筆、碑文の撰者はかつて松山聯隊長だった陸軍少将藤井幸槌。裏面には「猶興書院門生及有志者等建 石匠大阪天満平清」とあった。故郷松山に眠る若き英霊の、とわの鎮魂の証しである。

この小文は、このたびの寄進元、

近藤南州先生 自筆稿本など 奉納

平成十八年十一月一日、近藤南州先生自筆稿本類を中心とする旧蔵本三百余冊（木製本箱五箱）が、中尾堅一郎氏（中尾松泉堂書店）と中尾良男氏（中尾書店）から奉納されました。

松泉堂中尾堅一郎氏兄弟、ならびに南州先生三女千賀の嫁ぎ先、淀川区十八条の婦人薬種商、生々堂漢方の分家漢井泰頭氏がわたくしの元奉職先、府立桜塚高校の第六期卒業生であった学縁に導かれたところが大きい。併せて篤くお礼申し上げる。

なお、頼山陽の『日本外史』を二十年費やして詳注した澆華散人光吉元次郎（一八六七～一九二六）は、明治四十年から大正十年まで南州の猶興書院で学び、あわせて南州に詩の添削を受けていた。詳細は『混沌』第十九号（平成七年十二月十六日発行）所載、長澤孝三氏「澆華散人と南州先生」について看らねたい。

（木村兼霞堂顕彰会代表）

（送）現在 近藤南州先生旧蔵書は大阪天満宮御文庫に収納されている。

集殿にて、奉納された南州先生遺籍を前に、中尾堅一郎氏、良男氏を囲んで、水田紀久氏と寺井宮司、水無瀬禰宜ほかで款談。近藤南州先生と当宮の縁の話に花が咲きました。

この度奉納されました南州先生の自筆稿本類は、中尾松泉堂の先代熊

奉納書籍の前で

右から中尾堅一郎氏 寺井種伯宮司
中尾重宏氏 中尾良男氏 水田紀久氏



太郎氏（中尾堅一郎、良男ご兄弟の御尊父）が所蔵しておられ、戦災をさけるため昭和十九年に熊太郎氏夫人のご実家（伊賀上野）の蔵へ収納されたものです。つい先頃、蔵の修築の際、貴重な遺籍が見つかり、早速、中尾堅一郎氏、良男氏から、南州先生の旧蔵書二万冊が収められている大阪天満宮御文庫へ寄進された旨、お申出頂いた次第です。今後、大阪における漢学研究の貴重な資料として大切に保管して参ります。

池田市立歴史民俗資料館 特別展開催

『池田氏と牡丹花宵柏』

当宮から連歌書など多数出品

平成十八年十月二十日から十二月三日まで、池田市立歴史民俗資料館で、特別展「池田氏と牡丹花宵柏」が開催されました。池田氏は、中世摂津国池田に拠点を置いた有力国人で、その庇護のもと池田文化の礎を築いた連歌師牡丹花宵柏にスポットライトをあて、当時の池田の社会と文化についてわかりやすく紹介した展覧会です。当宮から『池田千句』、『東山千句』、『伊勢千句』、牡丹花宵柏『春夢集』、『牡丹花連歌』ほか多数の連歌書を出品しました。



特別展「池田市と牡丹花宵柏」
池田市立歴史民俗資料館



平成一六年に始まった「てんま天
神梅まつり」も、今年で第四回を迎
えます。

恒例の「盆梅展」では、樹齢二百年
を越える古木銘木をはじめ、当宮所
蔵の「天神画像」「御迎人形」や、「引札
(明治期の広告)」などをお楽しみい
ただきます。もちろん御好評をいた
だいている「梅の
木餅」も、当宮巫
女が丹精を込めて
ご用意しています。

■期間

二月十日(土)～
三月十一日(日)
九時～四時まで

■拝観料

大人五百円
小人三百円
幼児無料

■夜間イベント

期間中のうち、
二月二十二・二十
三・三月一・二・



■期間中の

境内催し物

梅まつり土産
コーナー

梅まつりの全期間
中、梅をテーマに
した様々なお土産
の販売店や飲食店
が境内北側に建ち
立ち並びます。

オープンカフェ

梅まつりの全期間

中、梅を取り入
れた温かい軽食やお飲み物など
をお召し上がりいただけます。

古本市

二月十七～十六日

茶会

二月十三日

骨董市

二月十七～二十三日

梅酒市

二月二十四日～三月二日

水墨画奉納式

二月二十四日

水墨画体験

二月二十五日

陶器市

三月三日～十一日

振舞い餅

三月四日

午前一〇時か
ら、天満宮青
年親睦会によ
る振舞い梅餅
をご賞味いた
できます。



■体験コーナー

縫い物教室 二月十一・十八日

挿絵貼り絵教室 二月二十五日

三月四日

新企画

大蔵流狂言

「盆山(ぼんさん)」

上のように様々な企画をご用意し
ていますが、なかでも今年の注目は、
夜間拝観中の二月二日(六時～八
時)に行われる大蔵流狂言「盆山」
です。茂山あきら、茂山童司さんが
演じ、茂山千之丞さんの解説・レク
チャーがあります。

「盆山」は、盆栽(盆山)を趣味に
ている男が、ある家に盗みに入り、
亭主に見つかって盆栽の影に追い込
まれます。亭主は初めから盗人の正
体を見破っていますが、「そこに居
るのは猿だな」と言われた盗人は、
必死に猿の鳴きまねをし、「犬だな」
と言われれば犬の鳴きまねをします。
しかし、遂には「鯛だな」と言われ
て困ったあげくに「タイタイ」と鳴
いて逃げ出します。その滑稽なやり
とりが面白い狂言です。
ぜひ幻想的な境内で、伝統芸の真
髓をお楽しみください。

浅野温子語り舞台



女優の浅野温子さんは、テレビや映画での活動とは別に、語り舞台「日本神話への誘い」をライフワークとされています。

それは『古事記』の世界をわかりやすく脚色した日本神話を一人で語る舞台です。平成十五年の伊勢神宮における公演を皮切りに、これまで全国二十九社で約二万九千三百人に披露されてきました。

そしてこのたび、大阪府神社庁の設立六十周年を記念して、下記の通り、府下四社で連続公演されたのです。



一〇月一八日 阿倍野神社

二〇日 当宮

二二日 誉田八幡宮

二四日 今宮戎神社

二〇日には、当宮本殿前に千二百名分の客席を設けて、特設舞台で繰り広げられる一夜限りの太古のロマンを楽しみました。

大阪天満宮献詠

風月社 平成十八年下半年秀歌

暑さすらとばす威勢の大花火
船渡御すすむ大川こめて

幹事 佐野秀子

風わたる京都御苑の深き森
暑さに倦めるこころ癒すも

幹事 友岡美佐子

秋晴れに山路歩めば松葉かけ
頭もたげて香るまつたけ

幹事 森本美也子

暑さあつき真晝に聴けり敗戦を
告げます陛下のくぐもりし御聲

東大阪 中山里江

亡夫共に二色ヶ浜にて泳ぎたる
初戀の日々偲ぶる盆

大阪 西脇か津

風薫り川面彩る鯉のぼり
皇子の生誕壽ぎまつる

東大阪 宝蔵寺京子

炎天に真向ひ咲ける向日葵の
力もらひて凌ぐ暑き日

神戸 鈴木敬子

土用波ひとときは高し国内外
好き放題に靖國を云ふ

八尾 松村曉二

花外樓の數寄屋普請の建築美
随所に賞つる職人の技

大阪 松村龍太郎

渡津海の波の花にぞ偲ぶるる
遠き小島の風の手枕

西宮 牛田眞理子

庭犬は暑さをさけて移動なし
つくばひの水飲みて晝ねす

神戸 松本美智子

また一人親しき友の旅立ちて
暑中見舞の筆はすすまず

堺 永田民子

葦簾立て西日を避けて休憩みたり
猛暑経てより夕餉の仕度

大阪 中瀬央子

湖面渡るさやけき風の心地よき
旅思ひ出し暑さ耐へをり

神戸 太田たか子

馥郁とかをる衣の袖通し
今日も幸せいのる嬉しき

京都 塩小路光宇

朝風にゆるる白菊うるはしき
薫りみちたり庭に立ちぬる

京都 塩小路淳子

金銀と今盛り咲く木屋の
薫りに和むわが庭の秋

岐阜 入江千鶴

貴人もあまた歩みし熊野古道
杉のにほひの満ちるたるかも

吹田 岩城富子

明け方の風の立ちし海原は
水面見えずにゆらゆら揺れて

東京 小嶺利子

せせらぎに聲も途絶ゆる歌の宴
貴船川床夏としもなき

選者 浅井與次郎

天満天神研究会開催

第二十三回天満天神研究会

一〇月一四日、当宮文華館において研究会が開催されました。

一、科研費報告書「太子信仰と天神信仰の比較的研究―信仰と表現の位相―」の合評

平成一四―一七年度の科学研究費補助金を受けてきた同研究は、これまで天満天神研究会との合同研究会を開催してきましたが、同報告書の完成を機に、執筆者による合評を行いました。

一、「五山禅林における太子信仰、天神信仰について」西山美香氏

西山氏は『武家政権と禅宗―夢窓疎石を中心に』の著書をもつ禅宗史の専門家ですが、禅宗における「太子信仰」と「天神信仰」について紹介されました。

第二十四回天満天神研究会

一二月九日には研究発表三本による研究会が催されました。三本ともに右記報告書の掲載論文を大幅に補訂する内容となりました。

一、「戦国期紀行文に見る太子信仰と天神信仰」鶴崎裕雄氏

一、「秘事・口伝の流伝と『日蔵夢記』の成立」下鶴隆氏

一、松浦清氏「大阪天満宮所蔵の異色の束帯天神画像をめぐって」

浪速菅廟吟社詠草

雪稜 松村曉二撰

七月課題「碧海舟遊」

悠山 永井達也

夏夕浮舟碧浪中 茫茫大海擅涼風
如然落日無雲覆 唯看水天相映紅

(訓読) 夏夕 舟を浮かぶ 碧浪の中に
茫茫たる大海 涼風を擅にす 然ゆるが如き落日 雲の覆う無く 唯だ

看る水天の相映じて紅なるを

(語釈) 擅 ほしいままにする。然 燃と同じで、もえること。落日 水

(地) 平線に沈もうとする夕日。水天 水平線で天と接するところ。

(詩意) 夏の夕べ舟に乗って海にこぎ出すと広々とした海上は涼風があたかも自由に我がものにできるようだ。真つ赤に燃えた太陽が雲に覆われることもなく沈もうとしている、私が見ているのは海と天が接する水平線の天も水も紅に染まる処である。

八月課題「江村夜泊」
鐵枴 北口晶將
煙罩江村夜泊幽 微風吹柳爽涼稠
一鉤新月涵波淡 又有水雞鳴荻秋
(訓読) 煙は江村を罩め 夜泊幽なり 微風柳を吹き 爽涼稠し 一鉤の新月 波に涵して淡く 又水雞の荻州に鳴く有り

(語釈) 煙 靄のようなもの。稠 しがし。鉤 づりばり。新月 細い月。水雞 水鳥。荻秋 荻の生えている島。

(詩意) 靄がたちこめる川辺の村に泊まる、微かな風が柳の枝をゆらして爽やかさが流れてくる。細い月が波に映るかのようである。どこからか水鳥の音がする。それは荻の生えている島からであらう。

九月課題「菅廟賞月」

王越 金生久夫

禮拜謹吟秋思詩 今宵祠廟極嚴儀

叢雲忽去清涼夕 明月來昇廟上移

(訓読) 礼拝して謹吟す秋思の詩 今宵祠廟 極めて嚴儀 叢雲忽ち去る 清涼の夕 明月来たり昇りて廟上に移らんとす

(語釈) 菅廟 天満宮。此処では当宮のこと。秋思詩 主神菅原道真公の漢詩。

(詩意) 礼拝をして謹みて秋思の詩を吟う、今宵の祠廟は極めて威儀をただしている。むらがる雲も去って爽やかな夕べとなり、十五夜の月が天満宮の上に輝いている。

十月課題「秋日漫吟」分韻
得先 秋甫 樋口和子
薔花如雪素秋天 一徑孤村金菊鮮
山靜日長殘照裏 詩情沸沸潤吟箋

(訓読) 薔花雪の如し 素秋の天 一徑の孤村 金菊鮮なり 山靜かに日長く 殘照の裏 詩情沸沸 吟箋を潤す

(語釈) 薔花 薔麦の花。素秋 秋のこと。金菊 黄色の菊。昔昔は菊の花は黄色であったとか。殘照 夕日。沸沸 わき出るさま。ここでは詩情が沸きでるさま。吟箋 詩を作った書きとどめる紙。

(詩意) 薔麦の花が雪のように白い秋の空の下、小径はぼつんとした村里に黄色い菊が鮮やかに咲き誇っている。山里の夕暮れは詩情もまたわき出て詩箋を豊にするようである。

人事任免

《委嘱》平成十八年四月一日付

総代 盛岡淑郎 殿

同 植西盛雄 殿

同 土居年樹 殿

歸 幽

小西 勇 様

平成一八年九月三〇日

享年七十三歳

当宮の熱心な崇敬者としてご尽力いただきました。心よりご冥福をお祈り申し上げます。

「天満天神えびす祭」

の復興

一月九日・十日・十一日



期間中の午前一〇時から午後二〇時まで、神札、福笹、吉兆や、熊手、箕、竹末広などの縁起物授与します。



「幟旗」奉納



また、期間中には、芳名を記入した幟旗を掲げ境内の賑わいを演出します。現在授与所において、その奉納も受付中です（二万円）。

昨今の「町おこし」の動きを見ていると、目先の新しさを狙った、一過性の奇抜な企画が多いように思えます。

その点、天満天神繁昌亭は「上方落語の興隆」を意図しつつも、往時の「天満八軒」の賑わいを呼び戻すという、歴史を踏まえた姿勢が、大きな評価を得ているようです。

七五三の季節には、境内に集う幼子と、繁昌亭に並ぶお客たちの交流もみられ、これこそ「天満」という風景が見られました。

本年から復興する「天満天神えびす祭」も同様に、歴史を踏まえた、一過性でない試みとして評価していただければと存じます。

大阪天満宮社報

てんまてんじん 第51号

平成18年12月20日印刷

平成19年1月1日発行

発行人 寺井種伯

発行所 大阪天満宮社務所

〒530-0041 大阪市北区天神橋2-1-18

TEL 06-6353-0025

印刷所 木村印刷株式会社

編集後記

本年九月、境内北側に「天満天神繁昌亭」がオープンし、かつての賑わいが戻りつつあるのを契機として、別記の通り、本年から「天満天神えびす祭」を復活し、さらなる天満の賑わいを期待することになりました。

当宮では、昭和五年に「銚流神事」を、平成七年には「天満天神七夕祭」を再興していますが、これに引き続く、故実の復興となります。



斎行日時（予定）

一月 九日（火）宵えびす

午前八時三〇分 遷幸之儀

午前九時 宵宮祭

一月 十日（水）本えびす

午前一〇時 えびす大祭

一月十一日（木）残り福

午後一〇時 報賽祭

午後一〇時三〇分 還幸之儀

